



～ 新年を迎えて ～

明けましておめでとうございます。

皆様におかれましては、健やかに新年をお迎えのことと、心からお慶び申し上げます。また、昨年中は亜熱帯農業センターの運営に対しまして、深いご理解ならびに多大なご協力を賜り、心から感謝し、厚く御礼を申し上げます。

昨年は台風の発生が多く、対策等で気の休まらない日が多い年となりました。農業被害もみられたほか、おがさわら丸・ははじま丸の欠航により農産物の出荷ができないなど、農業者の皆様にとってご苦労の多い年となりました。そのようななかでも、パッションフルーツ、トマトなどの基幹作物を始め、様々な農産物が生産され、島内はもとより島外の多くの方々に小笠原の味覚を楽しんでいただいたほか、新たな取り組みとして小笠原産パッションフルーツを原料としたリキュールが商品化されるなど、新たなチャレンジに取り組む農業者の皆さんのご努力・熱意に改めて敬意を表します。

さて、農業センターは今年度新たにストロングハウスの整備を行いました。これにより同一作物での栽培比較試験が実施可能となりました。今後はこれらの施設を活用し、より詳細な作物の生理的特性を解明する研究を行い、新たな生産技術の開発につなげていきます。また、環境に配慮した新たな侵入病害虫対策等の研究も行い、生産力強化、特産

熱帯果樹の安定生産や周年販売の実現に向けた取り組みを進めてまいります。

営農研修所では今年度、研修機能を備えたカンキツ類の実習圃場を整備しました。今後、現地での技術指導と実証試験の拠点として、小笠原レモンを中心としたカンキツ類の生産振興に大いに貢献できるものと考えております。

畜産指導所では島内で安定して入手可能な飼料で作った自家配合飼料の評価を行いました。より低コストで鮮度の良い卵を島民の方々に供給できるよう成果の還元を図ってまいります。

小笠原農業は地理的なデメリットを持ちながらもそれをカバーする大きな魅力を持っています。亜熱帯の気候を生かしたパッションフルーツ、マンゴーをはじめとした熱帯果樹、トマト、コーヒーといった魅力ある特産作物、農業センターではこれらの「強み」を最大限に活かす新たな技術開発を行うとともに、速やかな成果の還元を図りながら関係機関とともに小笠原の農業振興に貢献してまいります。

平成 28 年の始まりにあたり、引き続き皆様方のご支援とご理解を賜りますことを職員一同からお願い申し上げます、年頭の挨拶とさせていただきます。

<産業課長：藤野>

～ 小笠原島外からの購入苗から検出された生物類 ～

昨年度、農業者のみなさんに島外からの苗の導入に関するアンケート調査を実施した結果、半数が沖縄などからマンゴーなどを導入しており、今後もマンゴーなどの導入の意向が多いという結果が出ました。その結果をふまえ、実際に沖縄から苗を購入し、苗（土壌を含む）にどのような病害虫を含む生物が付随しているか、実態を調査しました。

2015年8～9月に沖縄県の2業者から10株と15株の合計25株のマンゴー苗を購入しました。各業者からの苗はそれぞれ沖縄からの出荷後3日、5日で父島に届きました。届いた苗は地上部（枝葉）の生物の付着の有無を調査後、鉢（ポット）から苗を取り出し、根の周りの土を落として土の中の生物を調査しました（目視できるもの）。

その結果、いずれの業者の苗も9割以上から何らかの生物が見つかりました。さらに、見つかった生物の約9割が土から見つかりました。見つかった生物としては、陸産貝類やアリ類が多く、これらの中には小笠原諸島からは未記録のマンゴーの害虫（ハゼアブラムシ、アカアシホソバツタ）や、近年小笠原

に侵入し問題となっているオキナワウスカワマイマイやツヤオズアリが含まれていました。したがって、これらは過去に島外からの苗と共に持ち込まれた可能性があります。

今回の結果から、島外からの苗には小笠原諸島未侵入の害虫を含む何らかの生物が付着してくることが前提であること、また、そのほとんどが土の中にまぎれてくること、が明らかとなりました。

土壌病害虫の駆除方法として、約50℃の熱水を土壌に注ぐ「熱水処理」があります。当センターでは来年度、本処理の効果や苗への影響について試験を行いません。〈大林〉



ハゼアブラムシ



アカアシホソバツタ



ウスカワマイマイ



ツヤオズアリ

ミカンコミバエ根絶 30 周年記念事業講演会のお知らせ

タイトル：「ミカンコミバエなんか知らない」

開催日時 父島：2月8日（月） 19:00～20:30 ビジターセンター

場 所 母島：2月9日（火） 17:20～18:20 営農研修所本館

内 容：DVD 上映『かくて害虫を制す』、根絶事業当時の元研究員による講演、再侵入警戒調査の現状報告 など

同時に、2月8日（月）～15日（月）までビジターセンターにおいてミカンコミバエに関するパネル展示を行いますので、合わせてご参加ください。

問合せ先：支庁産業課 2-2125 亜熱帯農業センター 2-2104

研究成果報告会のお知らせ

下記の日程で平成 27 年度研究成果報告会を行います。

父島～2月18日（木）15：00 より（農協直売所2階にて）

母島～2月19日（金）16：30 より（営農研修所本館にて）

◎生産者および関係機関を対象に開催します。是非、ご参加ください。

～ 高品質マンゴーを収穫するための冬から春の管理 ～

マンゴーの経済栽培が盛んになる気運が高まっています。主力品種「アーウィン」は、味や食感が日本人好みで、栽培と流通がうまく軌道に乗れば、パッションフルーツに次ぐ2番手の作物としての地位を確立できるのではないのでしょうか。

そのマンゴーですが、1月は花芽分化の時期です。しっかりと低温にあてて、充実した花芽を形成させましょう。この時期からすでに、高品質マンゴーを生産する勝負が始まっています。

前号でもお伝えした通り、重要病害である炭疽病の防除は、目には見えませんが花芽分化期から感染が始まっています。花芽分化期にはシマンダイセン水和剤、開花期にはオーソサイド水和剤を散布しましょう。

収穫後にハウスのビニルを外している方は、すでに開花期に向けて被覆をしたと思います。花芽分化期の土壌の乾燥は出蕾、開花を早めます。

同時に、被覆による雨よけ効果も病害虫防除には重要です。昨年

は雨が多かったので、かいはよう病が出ていませんか？雨よけをすればほぼ発生しませんが、罹病枝などは樹勢を低下させる原因となります。適宜、除去してください。



かいはよう病

また、この時期はハダニ類の発生もみられます。葉が白くかすれていたら要注意です。葉の表面に赤い小さなダニがいるかもしれません。余分な枝葉を取り除き採光や通気を良好に保ってください。発生したらマシン油乳剤や殺ダニ剤を散布しましょう。



ハダニ類

花芽が形成されたら受粉のためにハエ寄せをします。花粉の発芽や花粉管の伸長のため、23～30℃になるような温度管理をします。花序に太陽光線が当たるように花吊りをしてきましょう。これは、花粉媒介虫が訪花しやすくすると、花序が結露したことで生じる灰色かび病などの発生を防ぐことにもつながります。また、土壌を乾かさないようにすることも重要です。開花期以降の土壌乾燥は、落果の原因となります。

花序に葉が混じっているものを「混合花」といいます。この葉は花芽分化期に温度が高いと発生が多くなりますが、花芽の成長を妨げるので、早めに摘んでください。

今後はマンゴー栽培がさらに増えることが見込まれます。自家採種した実生苗を台木にし、接ぎ木苗にして販売することで、更なる増収も見込まれます。計画的な苗生産は営利栽培に有効です。

<小野>

農業者セミナー開講のお知らせ

今後の予定は以下のとおりですが、開催時間等詳細は「村民便り」等でお知らせします。

《2月》「トマト、露地野菜の作り方とおすすめの品種」

「パッションフルーツを用いた果実酢の加工技術について（父島のみ）」

父島：2月8日（月） 母島：9日（火）

講師：東京都農林総合研究センター 園芸技術科 沼尻研究員

東京都立食品技術センター 保坂研究員

参加を希望される方は、農業センター(担当:菅原)までお申込み下さい(TEL2104/FAX2565)

～ ミカンコミバエ防除体制について ～

南西諸島では、例年、強風によりミカンコミバエが飛来するため、トラップを設置し誘殺することで、早期の発見、速やかな防除が実施されています。しかし、昨年9月以降、鹿児島県奄美大島において、ミカンコミバエが継続的に確認されたため、果物の持出しが規制されるに至りました。同様に根絶の歴史を持つ小笠原の状況を心配された方もいるかと思しますので、現状をお伝えします。

【ミカンコミバエとは】

東南アジア原産の体長7mm位の小型のハエで（写真：農林水産省植物防疫所HP）、



ミカン類に限らず、マンゴーやトマト等、多種にわたる果実に寄生します。成虫が果実に卵を産み、

生まれた幼虫が果実内部を食べてしまいます。植物防疫法により、発生地からの果実の移動は禁止又は制限（くん蒸処理等による消毒の義務付け）されます。

【小笠原諸島におけるミカンコミバエ】

大正時代末期にサイパン島から果実とともに父島に持ち込まれたと言われており、昭和43年の返還後、都の調査において、聳島・父島・母島列島で発生を確認しました（硫黄島・西之島・南鳥島では発生なし）。

昭和44年度から、都は国の補助を受けて、ミカンコミバエの生態研究及びその成果を踏まえた根絶事業を実施しました。それは、①雄の誘引物質と殺虫剤の混合液を吸着させた板の散布により、個体数を減少させ

る。②人工増殖したハエを放射線照射で不妊化し、その雄を大量に野外に放し続ける。

これらの方法を併用することにより、世代を追うごとに正常な野生虫同士が交尾できなくなります。そして、ついには根絶を達成し、規制を受けてきた小笠原のミカンコミバエ奇主植物の移動が、昭和60年2月15日から自由となりました。

【再侵入の可能性と警戒調査の重要性】

ミバエ類の飛翔能力を考慮すると、小笠原への台風等による飛来の可能性は非常に小さいものの、交通網や通信販売の発達により、人為的な侵入の可能性がありますが、ミバエ類発生地域からの生果実の持込みは植物検疫上そもそも禁止されていますが、特に小笠原村民の皆さまは、海外旅行の際など十分ご注意ください。

都は、島内各所に設置しているミカンコミバエ誘引殺虫トラップによる成虫の存在確認、並びに野生及び栽培果実の採取分解調査による寄生の有無を定期的に調査しています（下表）。その結果、幸いなことに根絶以降30年間にわたり再侵入はありません。

トラップ設置数

聳島列島：聳島2、媒島2

父島列島：父島24、弟島2、兄島2

母島列島：母島15、向島1、平島1、姉島1

果実分解調査

平成26年度実績：21種類、6、881個

今後も気を緩めることなく、再侵入の早期発見・早期防除体制を維持継続し、小笠原の農業振興に寄与するよう努めてまいります。

＜産業係長：御船＞

農業センターニュースは小笠原亜熱帯農業センターのホームページにも掲載しております。

検索

小笠原支庁 → 小笠原亜熱帯農業センター → 農業センターニュース